B2-5

当院のリハビリテーションにおけるTablet端末の使用経験と今後の課題

○河野 美香子、宍戸 賢悟、奥野 奈保美、百代 貴子、上野 照雄
藤原 洋子、本多 和成、中村 龍、萬代 眞哉、衣笠 和孜

独立行政法人　自動車事故対策機構　岡山療護センター　診療部

【はじめに】当院ではH25年10月より重度意識障害者への刺激入力、意思伝達デバイスとしての利用、上肢手指訓練、高次脳機能障害への介入などの目的にてTablet端末(以下、Tablet)を3台使用している。現在までの使用状況・効果等を検討したので報告する。

【方法】リハビリテーション科スタッフ(PT5名、OT3名、ST2名)に対してH25年10月～H26年3月に訓練中の使用状況や目的、利点・欠点についてアンケート調査を行った。

【結果】入院患者41名に1回以上使用していた。1回の使用時間は約15分であった。理学療法では使用対象患者(39名)は重度意識障害が多く、覚醒や注視・追視促しを目的に動画視聴等を行なっていた。作業療法では使用対象患者(15名)は中等度意識障害が多く、高次脳機能向上や上肢手指機能向上目的での動画視聴、アプリケーション課題を行なっていた。言語聴覚療法では使用対象患者(13名)は中等度意識障害が多く、高次脳機能向上や意思疎通手段獲得に向け、アプリケーション課題等を行っていた。患者の変化として情動障害の軽減、追視・注視の改善があり、また開眼や表情変化が多くみられるようになった。Tabletを使用する利点としては、患者の嗜好に合った音楽・動画の検索が容易なこと、欠点としてはTablet以外の刺激を試みる頻度の減少等が挙げられた。

【まとめ】当院のリハビリテーションにおいて、Tabletは患者から様々な反応を引き出すための刺激手段の主流となりつつある。今後は1回の提供時間や他の物品との組み合わせ、効果の高いアプリや動画等を検討し、治療効果を高める必要があると考えられる。